

佐伯市・南郡の高峰彦岳（一名飛狐ともいう）山頂より一望すれば、遠くは伊豫（四国）がうっすらと煙り、眼下には蒲戸半島・鶴見半島が大島・大入島をすっぽりと包み、美しいリアス式海岸が、夢のように津々浦々を彩なし、恍惚の世界に引き込まれる。

また、振返って見れば、左手には祖母・傾の山々が悠然と聳え、向いは八戸・高野の原野が開け、真下には津久見の町がセメント色に浮ぶ。その向うは臼杵湾となる。正に三百六十度の景観である。

彦岳と大友宗麟

宮下良明

（会員・佐伯市二栄）



中世の昔、

此の山を愛し
また信仰した
人物は、何と
いっても、豊

後が生んだキ
リシタン大名
大友宗麟であ
ろう。激動の
人生を送った
宗麟は彦岳の

麓、津久見彦の内の別邸において、信者の看守る中、静かに其の生涯を閉じた。時に天正十五年五月二十三日、宗麟五十八歳。今ならばまだまだ血気盛んな年齢ともいえよう。

宗麟の墓は、今もなお線香の絶え間なく、大杉の根元にひっそりと昔をしのばせている。墳墓の地と余生を津久見彦の内に選んだ所以は何と理解したものか。宗麟は豊後の国（大分県）の至る所に先祖の残した立派な死場所があっただろうに……と、勝手に愚考する。だが、これも佐藤蔵太郎翁（鶴谷）の記録を見れば全てはうなづける。

天正二年（一五七四）四月、宗麟は、佐伯領内の標野（荘園領家の所有する原野で、他人の入ることを禁じた獵場）で巻狩の準備をするよう佐伯惟教に命じた。当時の巻狩は合戦を想定した、いふなれば軍事訓練と思われる。

佐伯の標野は、前島（大入島）・柴山（彦岳の麓狩生周辺）・蒲戸半島の三箇所、惟教は、宮の内に仮屋を設け、準備を整えた。

狩猟は十六日から二十日迄行われたが、標野の巻狩の

ほか、城山（樺牟礼山）・久部・堅田などで鷹狩を行い千二百余りの鹿や獲物を狩ったと大友興廢記は伝えている。

此の時、宗麟彦岳より眺めて曰く「前の島、形が入の字に似たり因って大入島と号す」と。即ち大入島は大友宗麟が名付けた島名で有る。

戦国武将宗麟は、此の大入島の一角に大牧場を造った、其の駿馬一頭を時の大宮八幡社へ献上したと有る（佐伯誌）。

大入島（大友牧馬場）

田壑麦禾生・野開梧佃裁

独大平謀作・人良馬牧無

秋月橋門は、在りし日の大友牧馬をこう詩っている。

佐伯史（中世史）によれば、

嘉吉元年（一四四一）八月上旬、大内（中国地方の大名）大友合戦の折、佐伯地方の海辺、宮の内・代後に入大内の兵船押寄せる、大友の将佐伯讚岐守これを撃退勝利を上げる……（大友文書録より）

とあり、これ等の先祖の戦った数々の教訓を宗麟自身、彦岳より見降ろす佐伯湾の浦々が、如何に要塞堅固かを

悟っていた事は充分推測できるのである。

後日、日向（宮崎県）にキリシタン信者の桃源境を夢見て、その目的を達する為、臼杵丹生島城より数百の兵船を出陣させた。

その船団を、鶴見半島を越える迄見届ける最適な所は彦岳より他にはあるまい。即ち、宗麟が選んだ見張所であると共に堅牢なる城であったろうことは、一人だけの過云だろうか。

昭和十六年（一九四一）の十二月八日、日本連合艦隊が、真珠湾を攻撃した、その秘密の集結場所が佐伯湾であり、十一月十七日未明、真珠湾へ向けて出港した当時の海軍の演習は、豊後水道・佐伯湾一帯であり、目標は彦岳であった。

艦隊の出入、また、演習が一望出来る彦岳は、常に官憲の目が光り、厳しかった戦時中の出来事は、ここに改めて申すまでもない。即ち、戦時中の彦岳は、黒いべールに包まれていたと言える。

今日、世人の衆目のうち、色々な史実が改めて見直されようとしている折、彦岳もまた長い軍事主義から解放され、戦後の苦しい時代を乗り越えた今、その歴史の門

を開こうとしているのである。

「佐伯史談」第一五〇号において、史談会事務局長佐藤巧さんの記「日豊ロマン」の中の「豊後に烽を置く（狼火）」を興味深く拝読した。また、延岡から点々と場所を通じ、狼火で中継し、佐伯迄到達させるのは極くわずかな時間しかかからないとのこと。では、その先までであったらどうであろうか。昔を想定すると、臼杵や豊後の国一円、果ては、遠く豊後水道を隔てる伊豫の地にその急を知らせる場所を設けるとしたら、狼火場は彦岳をおいて外にはあるまい。

此処に、日豊の名山彦岳を讃えた先人とその詩を紹介する。

扶揺公子

第六代佐伯藩主毛利周防守高慶（源林院）公第八子。有名な漢学者。

飛狐山色彩雲辺

下有層崖瀑布懸

自是香爐千仞水

揮豪好作謫仙篇

中島子玉

氏は日田咸宜園・広瀬淡窓の高弟（佐伯藩士）頼山陽曰く、自分は西遊

して山水に耶馬溪を得、人才に中島子玉を得たと褒め讃えている。

子玉の墓は、佐伯の久成寺境内にあり、心ある人々により花や線香があげられ、供養されている。

飛狐聳処試豪遊

爽道松杉白日幽

谷暗崖陰山鬼語

林深樹梢嶺猿愁

遠帆忽入雲中尽

遙興宛如天際浮

茅屋婦来心恍惚

夢魂猶掛瀑泉頭

秋月橋門

文化六年生まれ。十六歳で広瀬淡窓の門下生となる。後、佐伯に入り、毛利公に仕え、藩学の教授となり、明治になって新政府誕生と共に三河葛飾の知事となる。

飛狐之嶺踰層巔

長嘯一聲人欲仙

大似狗哉雲走谷

高於我者目離天

穴成巨室十圍樹

瀑作疎簾万丈泉

南北東西難可弁

柴煙深處自飄然

小林黙玄

弥生小田井路を造った佐伯藩家老小
林九左衛門ではないかと愚測する。

している。

彦岳音頭

作詩・作曲

野々下一太

般若洞幽栖老龍

瓜痕数寸洞前松

舞踊振付

花柳若四郎

夜深靈頼驚人後

月在春雲第一峯

一、登りましよう彦岳様へ 三、豊後水道黒潮寄せりや

中根貞彦

佐伯出身（臼杵から養子として佐伯
に入る）元三和銀行頭取。佐伯合同
短歌会「彦岳」の序文に、画家管一
郎先生と共に彦岳を眺めて曰く、そ
の雄大さ東京ドームに似ていると。

頂上の眺めに心は踊る

沖は白波海鳴り聞こゆ

石の祠にまづ額つけば

はなれた小島の水の子島は

神の声する

白い灯台

神の声する松の風

白い灯台目にしみる

の雄大さ東京ドームに似ていると。

ホニソレソレヨイ

四北は津久見よ

ジャナイカ、ヨイジ

みかんの里よ

国木田独歩

佐伯滞在中、彦岳登山の記録を残す

ヤナイカ

遠くかすむは由布岳鶴見

佐藤蔵太郎

眺望絶佳、東南は水天一色際涯なく

三南見下ろしや佐伯の海にや

こいしや湯煙昇る

俱豫土郡山、島嶼の黛色雲に接し元

粋な島々釣する小舟

飛んで行きたや

暉水墨の図を訝り、騒客を索るの勝

沖にや化粧した

飛んで行きたや

地なり。

フェリーも浮かぶ

別府の湯

此のように多くの先人達が彦岳に登り絶讃している。

乗って行きたや

五、西は山国緑の樹海

地元でも、野々下一太（元県立佐伯高等女学校教師）が

乗って行きたや四国路へ

祖母が見えるよ

彦岳音頭を作詩作曲し、皆に親しまれ、広められようと

（以下はやしは省略）

ひとときわ高く

阿蘇の煙は霞に消ゆも

駒よ嘶け駒よ嘶け草千里

六 佐伯湾からはるかに仰ぐ

彦の山並なつかし嬉し

丸い頭に両手をひろげ

仲良く暮せと仲良く暮せと村を抱く



また、作家で有名な遠藤周作氏が、大分県の平松知事

の要請により、キリシタン大名大友宗麟を小説化すると

いう。臼杵・津久見は勿論の事、大分県中が、その資料

収集に夢中になっていると聞く。是非、彦岳を中心の宗

麟の行動を、遠藤氏により世に出していただきたいもの

である。

彦岳は、遠い昔から西の英彦山（福岡県）、東の彦岳

と共に修験者の修業と信仰の山として、人々に親しまれ

愛された山である。

以上、佐伯市史、佐伯誌を参考に愚拙の勝手な所見を

述べさせていただき、今後とも郷土が誇る彦岳を愛され

んことを心から祈る。

写真説明

写真① 雄然と聳える日豊の名山彦岳。矢野龍溪佐伯

八景に選ぶ。

写真② 津久見彦の内、大友宗麟のキリシタン墓標。

写真③ 不動明王。彦岳の中腹にあり、此処は一名不

動の滝という滝裏にあり、カッと見開く目はす
ざましく、修験者の道場となっている。

